



2012・10・16

第164号

101-0065 東京都千代田区
西神田 2-5-7 神田中央ビル 303

TEL 03-3221-5075

FAX 03-3221-5076

草の根から9条守れの世論盛り上げを

「九条の会講演会」に1800人

「九条の会」は9月29日、東京千代田区の日比谷公会堂で「三木睦子さんの志を受けついで 九条の会講演会一今、民主主義が試される時」を開き、1800人が参加しました。

講演会では、呼びかけ人の大江健三郎、奥平康弘、澤地久枝の3氏が、九条をめぐる危険な動きと、草の根からの世論を盛り上げることの重要性を訴えました（別掲）。また文化行事として、俳人、歌人、詩人の分野別の「会」が、それぞれの分野の作品を朗読しました。講演の合間を縫って、呼びかけ人会議が開かれ、「九条の会」としての訴えを確認し、小森陽一事務局長から当日の参加者に紹介されました。

呼びかけ人の講演(要旨)

作家 大江 健三郎

2005年7月の有明コロシアムの集会での

「九条の会」からの訴え

明文改憲、集団的自衛権の行使容認などの解釈改憲の動きが強まる重大な情勢のもとで、学習と対話活動が重要になっており、草の根からの世論の盛り上げが重要になっています。

○「九条の会」は呼びかけ人などによる憲法セミナー、事務局主催の学習会を開きます。各地の九条の会も草の根の学習会を連続して開きましょう。

○来年の秋には憲法についての討論集会を開きます。全国から結集しましょう。

三木さんのお話が、岩波ブックレット『憲法九条、未来をひらく』に載っています。戦争が始まった時のことで三木さんは22歳です。

「いよいよ対米戦争が始まるというとき、私は身ごもっておりました。この子たちが将来、日本を背負って立つときのことを考

えれば、どんな苦しい思いをしてでも、戦争を阻止しなければならない。できるだろうか？ その戦争の大きい責任を、か弱い子どもたちに、負わせてもいいのだろうか。そう思いながら幼い子どもを育ててまいりました。戦禍が日本中を取り巻いて、バラバラ、バラバラと落ちて来る焼夷弾の下で、子ども抱いて逃げるわけにいかないんですね。子どもを乳母車に乗せて、若いお手伝いさんに託し、『子どもたちを連れて、どこかへ逃げて行ってちょうだい。そのうちに私が訪ねて行くわ』なんて頼りにならないことを言うておりました」という話から始まります。そして結びはこうです。「国民が少なくとも本当に平和で手をつなぎ合って暮らせるならば、大国でなくたっていいじゃないかと思うのです。静かで平和で楽しい世界にしていきたいと思います」。

三木睦子さんは、戦前、戦中、戦後をつうじ、三木武夫という政治家の脇に立っておられた。武夫氏は、田中首相によるロッキード事件という汚職を徹底的に究明し、日本の防衛費をGNPの1%以内に抑える方針をつくった。こういう人を夫にその政治生活を保ちつづけることに協力した三木睦子さんでした。その人のことを忘れることはできない。

とくに顕著なこととしていま考えていることを一つずつお話します。

第一は、この国は民主主義の国だろうか。民主主義とはどのようなものか、です。

この9月15日から9月25日のあいだに、民主党のリーダーがあらためて政権を握るであろうことが決まった。それから自民党の新しいリーダーは、かつて病気で首相を

やめたとき、集団的自衛権についての見解を見直すと言っていたが、その彼が、自民党の総裁選で憲法を改正する、とくに集団的自衛権は早急に実現にする、と述べている。

さて、その9月15日の新聞に、野田政権がその前日の14日にエネルギー・環境会議を開き2030年代に原発稼働ゼロをめざすという新しい政策を決めた、という記事が載っている。2030年代では遅いという声もありますが、しかしまず原発稼働ゼロを目標とすることを日本政府が宣言することは世界的に、また国内的に大きな意味があると考えられる。

このことに期待をもったのは、それがいかにも野田政権らしい考えだからではない。民主党ですらも、野田首相すらも、この新戦略をまとめざるを得なかった。すなわち、民衆の意思が非常に強く示されたために、2030年代に原発稼働ゼロということを声明せざるを得なくなったという現実があったからだ。

民衆の運動はなお続いており、毎週金曜日の首相官邸を包囲するデモも続いている。それがあつた以上、野田政権の約束は実際に確実になるだろう、という希望をもった。私は言いたい。現在の状況を見て、あれだけ大きい原子力発電所の事故があり、現在も16万人の方々がまだ自分の土地に帰れない。この間の政府の意見聴取会でも、パブリックコメントでも、原発ゼロが圧倒的に多い。そして私どもは原発の廃止を求め10数万人の大集会を開くことができた。それが日本の民衆の意思だということがはっきりして、野田政権は2030年代原発稼働ゼロ

をめざすといわざるを得なかった、と私は考えていた。

その発表があった翌日から一週間、私はすべての新聞、英字新聞も買って、全部切り抜きました。その発表の二日目から、これに対する国内的、国際的な反論が盛大に噴き出した。一番大きな力はアメリカで、アメリカの政治家たちが日本にやってきて異口同音に、これまでの原発に対する政策をはっきりさせろと言った。国内では経済界がいっせいに反対した。経団連の会長が首相に電話でこう言った、「了承しかねる」と。野田政権は閣議決定を棚上げしました。原発を廃止するという彼らの新しいエネルギー政策を、一挙に取り消してしまう。原発の廃止については何一つ公式に言うことなしに、次の政権を担当しようとしている。これが日本なのです。

そこに民主主義があるのか。その民主主義でない政府をどのように揺るがすことができるか。選挙によって打ち崩すことができる方法ですが、しかし第二政党の自民党も憲法改正を心がけている人物を総裁に選んでいます。あの政党に原発の全面廃止を期待することはできない。こういう時に私たちはどうするか。それは私たちの市民の意思を表明しつづけることしかない、と私は考えます。そしてこういう九条の会の集会が開かれるということ、このようにたくさんの方が来てくださることに非常に励まされる。

私が信頼している沖縄のすばらしい作家が、最近の新聞に談話を発表されていました。私はショックを受けました。彼はしばらく苦しいところでがんばっている人です

が、その彼が沖縄で10万を超える大集会が開かれた後に、自分は今どのようにすすんでいかかわからないと言われている。また、ある女性、家庭の主婦の方が、私たちは米軍の基地の中に乗り込んでやろうか、という気持ちさえもったという談話を発表されています。

沖縄の新聞で、そういう絶望的な感じすらする強さの市民や知識人の声を見たのは初めてです。彼らは本当に民主主義の言葉を発している。そして沖縄はいまオスプレイ——航続時間の長い、そしてたくさんの海兵隊員を乗せることができる、しかし事故が多い——に反対する運動は、激しくおこっている、それを無視して、日本政府がオスプレイを実際に働かせることをアメリカ政府に了承している。「私たちはアメリカにモノを言う立場にない」とまで言っている。それが自立した民主主義の国なのか。それを私たちはいま、沖縄の問題としてみっていますが、それは日本の国全体の問題、私たちが憲法を考えるとときに考えなければいけない問題である。

日本は講和条約を結んで独立するまでに9条をもつ憲法をつくった。それは政治家たちが国民のことを考えたからではない。彼らが心配したのは、日本が軍備をもつことは、日本が大きな苦しみを与えた周辺の人々に受け入れられない、ということ。しかし当時は冷戦の時代で、ソビエトに対して軍事的な優位を保つためには、日本の軍隊を無くしてしまうことは困ると大筋で考えている。そこで彼らは沖縄を切り離し、沖縄をアメリカの支配のもとに置いた。大きい基地をつくらせ、核兵器もそのまま、

核兵器を積んだ船が自由に出入りできるシステムだった。そして明治維新の直前、日本が独立した国だった沖縄を併合したように、今から40年前におこなわれた沖縄の施政権返還は、もう一度沖縄を自分たちの植民地にして米国に提供するための沖縄再併合であり、その現実がいまある。私の沖縄の友人たちが論じています。

沖縄のオスプレイに反対するあの大きいデモと、私たちの原発の再稼働に反対する大きい運動、この二つとも憲法にかかわっている。私たちがいま持っている憲法第9条を守りぬく、世界に向かって守り抜く、アメリカに向かって守り抜く、あらゆる国にたいして守り抜くこと。そういうことを私たちは自分たちの問題としておしすすめる必要がある。

憲法研究者 奥平 康弘

寺島実郎さんが今年の『世界』6月号で、現今の最大の争点の一つである原発問題について書いています。自分は、「原子力の基盤技術の維持と蓄積」こそ大事と考えているのに、いまずぐ無くすなどというのはとんでもない間違いだと論じ、「私は、多くの『脱・原発』の論調に、非武装中立論にも通じる虚弱さを感じる。敗戦国日本で、深い省察にたち、『二度と戦争に巻き込まれたくない』との思いで『非武装中立』を希求した人たちが存在したことも理解できる。しかし、峻厳な国際環境のなかで瞬く間に空虚な理想論にさせられていった。求められるのは、重層でたくましい構想力なのである」。

私の学生時代には再軍備という政策指向

が非常に警戒されて、それに対抗して「再軍備しない平和主義」という大きな枠組みで「非武装中立」という言葉が盛んに用いられていました。その言葉を彼は『世界』の論文で再び脚光を浴びさせ、「非武装中立」論が瞬く間に空虚な理想論になってしまったように、脱・原発も空虚な理想論になる、というわけです。

寺島さんは、瞬く間に空虚と化した、といますが、60有余年の歴史のなかで、「非武装中立」あるいは「再軍備反対平和主義」などいろいろな言葉で言われてきた9条は、どのように闘われてきたか、闘われずにはすまされない状況のもとに置かれてきたか。

国際的に朝鮮戦争がおこり、国内的に占領が終了する時期とほぼ重なり合って、50年の警察予備隊に始まって54年には自衛隊法ができる。そうすると政府としては、世論あるいは国会対策として、自衛隊法を正当化する課題に立ち向かわなければなりません。朝鮮戦争を経て占領軍がいなくなるという状況のなかで、わが国をわが国だけで守る実力をもつことは、憲法9条第2項が禁と止する「陸海空軍その他の戦力」にあたらぬ言い始める。そして集団的自衛権の対極にある個別的自衛権の理論として、内閣はいまでもそう主張している。

そして自民・社会の「2大政党制」を確立した「55年体制」のときには、憲法改正のための手続きを定めている憲法96条の規定を乗り越えて、衆参両院の3分の2以上の多数を占める国会をつくろうと考える政治家たちがあらわれた。それが55年からずっと続き、憲法96条の規定、国会両院議員の3分の2以上の多数を得た後、国民過

半数の賛成を得るという規定がその時以来ネックとしてのしかかってきている。

初めは個別的自衛権だけだった。ところが湾岸戦争あたりから、アメリカが「旗を立ててやってこい」と言うようになり、だんだん自衛隊を海外に出す。しかしその頃に憲法改正を訴えたかという、訴えても何の意味もない。国民の過半数はとれるかもしれないが国会で3分の2以上の多数をとれない。どうするかということが問題になって、支配層にとって集団的自衛権が可能か可能でないかという議論と同じように、宿題になっている。

さて今度はいま領土問題、なかんづく尖閣諸島が問題になっています。そうしたなかで、東京都知事石原氏は、「憲法、憲法というというのはバカだと」と言わんばかりに、「憲法破棄」という言い方をしています。彼のレベルで何の学問的背景とか、それがもっている意味とか、それがもっている大問題とかを考えずに軽々しく「憲法破棄」という。

大阪市の橋下市長はもっと怖い。橋下さんたちが「維新八策」の中で語っているポイントの1つに「憲法96条を改正」がある。そして憲法9条に関しては2年間かけて議論し、国民投票をする。「日本人全体で9条をどうするか決めなきゃいけない時にきている。9条の改正内容については、政治家が論議し国民に決めていただく」、こう言っている。

ところが国民の選択にまかせると言いながら、国民が9条を維持して、戦争はしないという「自己犠牲はしないことを選ぶなら、そういう国でやっていけばいい。それ

なら僕は、この国と別のところに住もうと思う」。つまり自己犠牲をしてでも戦うことを憲法9条は禁止している。それを国民が選ぶなら自分は日本を出て行く。そんなことを言う人がいる。

加藤典洋という文学評論家があります。彼は15、6年ちょっと前に『敗戦後論』という本を書き、その中で、敗戦という超絶的な運命を日本・日本国民はどのように受け止めたかを論じ、押しつけられた憲法から出発したことをきちんと自覚し、そういった性質のものを自分たちはあらためて「選び直すべきだ」と論じています。

「選び直し」とはどういうことか。私などは、たとえば砂川訴訟などを通じ、憲法9条を見ていただけではなく、私たちもいっしょになって守ろうとした。つまり、加藤さんの言葉を使うと、そういう形で私たちは「選び直す」ということをずーっと続けてきている。憲法9条に関する訴訟で、紛う方なくその時そのときのその状況にあわせて、私たちは9条の魂を選びとってきた。それは「55年体制」以降、今にいたるまで。

それを培ったのは何か。ちょっとおもしろい話をご紹介しますが、「自衛隊があったからって困ることない。何も憲法9条を改正する必要はないじゃないか」という議論がある。自衛隊は国民に受け容れられている、という種類の改正反対論あるいは改正消極論です。

そういう議論に対し、加藤典洋氏の、「十年後の敗戦後論」という論文(『論座』2007年6月号)がある。いまはもっと危機が深まっていると言える時期ですが、十年後の論

文でも相変わらず「選び直せ」と書いている。しかし他の視点もある。自衛隊がいて困ることはない、何も憲法を変える必要はない、という評論家がいるが、彼は「イヤちょっと待て」と言う。「この憲法はいったい何を戦後の日本に与えてきたのか。この憲法は何を戦後国民に与えてきたか。それを一言で言うと、高邁な理念である。これは失うべきものであってはならない」と言う。さすが文学者というのはこういう感情を持っているのかと感心しました。

日本国憲法は押しつけられたなどといいますが、亡くなられた加藤周一さんは、「押しつけられたからといっても、中身がよければいいではないか」とおっしゃった。9条も押しつけられたということはあるかもしれない。しかし、あの「高邁な理念」を、押しつけられた私たちが私たちの感度に合うものとして承認し、「選びとってきた」。裁判一つひとつとっても選びとってきた。国民のものになってきた。9条をめぐる争いをつうじ、9条はいかなる字句の改正もなしに今でも生命力をもっている。

これが気にいらないので、自民党が改正案を出しました。それは、9条だけをもってくることは避けた。いついかなる世論調査をしても9条は人気がある。だから水増しして全文改正にする。けれども中心になっているのは明らかに9条です。しかも自民党も96条改正を出してきている。自民党草案は、「この憲法の改正は、衆議院または参議院の議員の発議により、両議院のそれぞれの総議員の過半数で国会が議決し、国民に提案してその承認を得なければならない」。明らかに過半数という言葉と3分の2

の違いは小さな違いに思われがちなほど技術的な要素がある。

ここにきて、いろいろな矛盾をさまざまな分野で激化させているので、なんとか転機を見いださなければならないというのがこうした動きの背景にある。そういう重要な時期にあることを強調したいし、そのなかでわが九条の会は結成時の原点にたって草の根からの運動をすすめて、9条の魂を空虚な理想だなどと言わないで、今一度われわれは「選びとる」ことをしたいと思います。

作家 澤地 久枝

三木睦子さんは、いろいろな人生経験を経て、若い時から戦争否認の気持ちを強くもち、九条の会の初めから亡くなられるまで、きっちりとした生き方を示されました。

三木さんは、敗戦1ヶ月前の昭和20年7月、家族の一人は生き延びてほしいと、徳島の三木武夫さんのお母さんに長女を預けようとした。睦子さんは背中に長男をおぶひ、4歳の長女の手をひき、夫の武夫さんは持てるだけのものを持って旅へ出ます。日本中空襲ですから、鉄道が破壊されて線路などない。枕木づたいにずっと歩き、列車が走っているところはかろうじて超満員の列車に乗り、ともかく徳島の三木邸についた。五右衛門風呂に長女を入れると、4歳の子は気丈に「戦争が終わったら迎えにきてね」と言う。しかし父である三木さんは娘の体を洗ってやりながら手ぬぐいで顔を拭いて涙を隠したというのです。東京に帰っていく両親は明日もわからない、と思ったでしょうね。睦子さんは、戦争はなん

てひどいのだろう、一日も早くやめなければ、という気持ちがふつふつとわいたというのです。戦後 67 年、ずっとそういう気持ちをもって生きてきたのです。

2007 年 6 月ですが、三木さんは九条の会の学習会に行っています。どうしても言わなければならないことをもっていたのです。それは戦争中に、陸軍が後ろで糸をひいて日本の政治を動かす大政翼賛会があって、総選挙がありますが、大政翼賛会の推薦を受けないで選挙をたたかって勝った人のなかに三木武夫さんがいます。話は、その非推薦議員の中にいた安倍寛という人です。安倍寛のことを、三木さんはどうしても若い人たちに言いたかった。戦争がだんだんひどくなってきた時に、安倍寛さんは早くに奥様を亡くされてご飯の支度をする人がなく、夜ふけて、特高につけねらわれながら、夜陰にまぎれてやってきて、「奥さん、何か食べるものはないですか」と言われたというのです。三木さんは、この人は本当に食べるものに困っている。しかもご自分は特高につけねらわれながら、平和のために、戦争をなくすために安倍寛さんは三木武夫さんと夜中にひそひそと話をし、そして話を終えると「じゃ」と言って闇の中に消えていったというのです。三木さんが伝えたいのは、かつて総理になった安倍晋三氏について、マスコミはなぜ母方の祖父の岸信介の縁ばかりなのか。父方の祖父の安倍寛という、戦争をしてはならないと骨身を削った人がいたことを知るべきなのです。三木睦子さんの思いは、よく伝わってきました。そういう語り手でした。

最後まで頭は明晰で、話が上手で、政治

家の妻として信念をもって演説をしてきた人だと思いました。そういう三木さんを失った痛手を思います。

最近テレビのニュースで、アメリカの海兵隊と日本の陸上自衛隊が、グアムの海岸を使って島嶼奪還作戦をやっているのを見ました。何か顔に塗ってアメリカ人か日本人かわからない。でも、島嶼を奪い返す作戦をアメリカと一緒にやる必要があるのですか。自衛隊が国外に出ていくことも憲法違反なのに、出ていったら、こういうことまでやるのかと非常に腹をたてて見ました。新聞がカラーであるすごい顔を報じたら、みんなぎょっとするでしょうがやりきれませんね。

防衛省に防衛大臣までできてしまったと思ったら、防衛省はつぎつぎと汚職です。防衛予算はすごく大きいですから。戦闘機などをつくる時に入札をする。AとBの二つの組織が競争しているときに、AにBが出しプランを流す。そうすると相手がいくらで入札するかわかる。だから、ずーっと同じ会社が防衛省の発注を受けている。そしてちゃんと見返りが斡旋した自衛官に行く。とくに防衛費・軍事費は、必ず腐敗するんです。

戦前も、日中戦争の発端から無条件降伏まで、軍事予算は年度で切り替わりがなくずっと続いています。そして軍人たちの得たものは、何につかったか一切問われませんでした。私が知っている範囲でも、2・26 事件で一度は反逆的なことをしたとして禁固何年の判決を受けた人たちが、東条内閣を批判する雑誌を出していた。このお金はどこから出るのかと別の記録を見ていたら、

たとえば主だった青年将校の一人の尋問調書には、その日関東軍司令部にいったにがしの金をもらったという、そのなにがしというお金が、戦争中のことですが、私には信じられない天文学的な数字でした。そのお金で、当時許されない政府批判ののっている雑誌を出しているのです。軍隊、軍事力がもっている性格は、戦争に負けたから、自衛隊に形を変えたからといって改まっていません。

この間の二つの政党のリーダーを選ぶ選挙を見ていて私は、日本という国はこんなにダメな国かと思いました。去年3月11日とそれに続く原発事故のとき、日本は最低と思ったけれども、もっとひどいです。沖縄のことなど何も言わない。オスプレイの問題も何も言いません。それから福島を中心とする被爆した人たち、原発は今後どうするかということに触れている候補者はいないではないですか。そして消費税の値上げは、民主党だけでは決められなくて、自民党が寄り添って決めた。何もほかのことを決めないうちに消費税をあげるという、この国が民主主義の国だということを、私には信じられません。

自衛隊がどんどん防衛予算をとって、いまや世界何番目かの軍隊になっていることは9条違反どころではない。私の気持ちでは自衛隊はゼロにしたいです。そういうと「震災のときに役にたった」という。でも税金で養い、組織的に訓練されている健康な日本人男女の集団が、たとえば地震などの時に出かけて行って、無償で働く。丸腰です。それを任務としてやる集団に変えたらいい。そういう集団ならば、たとえば

よその国で天災が起こったときに、派遣できるではありませんか。

いま、アメリカは無人爆撃機を作って、アメリカ本土でコンピューター操作すると、その爆撃機はたとえばアフガニスタンに行つて爆弾を落とす。人工衛星で見ていて人口が密集しているところを狙ってやるが、実際には、そこにいたのは軍隊ではなくて、結婚式だったということがある。そういう無人の爆撃機をつくって、まだやめると言っていない。そういうアメリカと手を組んで、日本は戦争をやろうとしている。

加藤周一さんが1996年の朝日の「夕陽妄語」に書いていらっしゃる。だんだん、日本は良くない方向に行っている、その土台にあるのは日米安保条約ではないか。1952年に布かれ、60年に改訂されたが、日米安保条約にはいま日本人が望んでいることなどは入っていない。一部の人たちは、アメリカの核の傘の下にいて日本は経済発展したという。だが1990年代にソビエトは崩壊し、冷戦はなくなった。日本がアメリカの意向にくっついたままでいいことはあるか、と加藤さんは問うています。二つの道がある。一つは現情を推し進めること、一つは根底から考え直して独自の国づくりをやること。後者は非常に困難だが、困難な道を選んだ先に明かりがさしているのではないかと。

日本が本当の意味での民主的な国家として、市民が市民らしく生きていく、さらにすべての命を大事にする国にするために、一人ひとりの意思と勇気が試されていると思います。